

13. 心筋シンチグラフィにおける ^{123}I -MIBG と ^{201}Tl CI の比較

斉藤 聖宏 安久津 徹 伊東 一志
 駒谷 昭夫 間中友季子 山口 昂一
 (山形大・放)
 千葉 純哉 (同・一内)

^{123}I -MIBG 心筋シンチグラフィのうち、ほぼ同時期に ^{201}Tl CI 心筋シンチグラフィが施行されている症例 42 件、42 ペア (虚血性心疾患+DCM) について検討した。ブルズアイ表示を 5 segment に分割し、segment ごとに、所見を有する程度により点数化した。ペアごとに 5 segment の合計点による対比を、また segment ごとの合計点の対比も行った。MIBG シンチで虚血巣よりも広範な除神経領域を示すことが確認され、また、TI シンチでは infero-posterior で false positive を示すことが多いとされているが、一致する結果は得られなかった。

14. 肺癌手術症例における肺血流シンチグラムの定量的評価の意義

西 直子 及川 茂夫 佐々木理佳子
 淀野 啓 竹川 鉦一 (弘前大・放)
 西澤 一治 (弘前市立病院・放)

手術前の肺癌症例 43 例について $^{99\text{m}}\text{Tc}$ -MAA 185 MBq \times 2 を健側臥位および仰臥位で静注し、それぞれの posterior view における両肺の activity を計測して、健側臥位における健側肺の activity/仰臥位における健側肺の activity、および仰臥位における健側肺の activity/仰臥位における健側肺の activity+仰臥位における患側肺の activity を算出し、FVC、FEV_{1.0}、PaO₂ の術後/術前比、および生存期間との相関関係を検討した。その結果後者と FVC、FEV_{1.0}、PaO₂ の術後/術前比との間の相関係数はそれぞれ 0.517, 0.389, 0.659 で、ある程度の正の相関関係が見られたが、以前の諸家の結果より悪く、posterior view のみを対象にしたことが原因と思われた。

15. 肝胆道シンチグラフィの定量的評価による肝疾患の重症度評価

油野 民雄 竹井 秀敏 早坂 和正
 高塩 哲也 斉藤 泰博 山田 有則
 吉川 大平 (旭川医大・放)

$^{99\text{m}}\text{Tc}$ -diethyl IDA 185 MBq 静注後、1 frame/30 sec で 60 分間データ収集し、Juni らの方法 (Eur J Nucl Med 14: 403, 1988) に準じて、deconvolution 解析を行い、得られた肝の伝達関数より肝への $^{99\text{m}}\text{Tc}$ -diethyl IDA の抽出率 (EF) と肝からの平均通過時間 (MTT) を求めた。EF と MTT の診断的意義に関して種々の肝疾患 61 例を対象に検討した結果、EF、MTT ともに疾患特異性は認められなかったが、重症度の評価に関して有用な結果を示した。特に EF は、重症度が大きくなるに伴い有意に低下を示した。一方 MTT は、中等度以内の肝機能低下の範囲では、機能低下の度合に応じて値が延長したが、高度低下では逆に短縮したため評価に問題を残した。

16. 経皮的腎血管形成術前後における DMSA 腎シンチグラムの検討

三浦 努 木村 元政 関 裕史
 加村 毅 高橋 直也 小田野行男
 酒井 邦夫 (新潟大・放)
 武田 正之 米山 健史 (同・泌)

1986 年 5 月から 1992 年 7 月までに当院で腎血管高血圧症 (片側狭窄 4 例・両側狭窄 4 例) の診断のもとに PTR 施行された 8 例 11 病変の術前後の DMSA 腎シンチを検討した。術前の DMSA 摂取率は、片側狭窄 2 例で左右差は認められるものの正常値を示し、両側狭窄では狭窄が軽い側では高値を示した。術後血圧や血漿レニン活性が急速に正常化するのに比して、DMSA 摂取率の回復が遅れる症例が認められたが、術前代償性に摂取率が高値を示していた対側の摂取率が低下してくることが、診断の助けになった。回復の遅れの大きな要因に代償性腫大の関与が推測される。